

第5回: 短期のマクロ経済分析 —有効需要と労働市場—

担当者: 佐々木 啓明*

2010年5月25日

*京都大学経済学研究科. E-mail: sasaki@econ.kyoto-u.ac.jp

—短期と長期の違い—

経済学では分析の便宜上, 分析対象期間を短期と長期に分ける.
一般的には以下のように分類する.

第1の分類: 期待が実現していない状態を短期, 期待が完全に実現する状態を長期とする.

第2の分類: 資本ストックが一定の状態を短期, 資本ストックが変化する状態を長期とする.

テキストで採用する短期の定義は, 第1の分類と第2の分類の折衷型.
→ 期待は完全に実現されているが, 資本ストックは一定の状態.

—マクロ経済における利潤の決定—

閉鎖経済, 政府部門なしを想定する.

以下ではテキストとの記号の違いに注意.

名目国民所得 pY を所得面と支出面で表す.

$$pY = wN + \Pi = pC + pI. \quad (1)$$

労働者は賃金をすべて消費に回し, 資本家は利潤の一定割合 s_c を貯蓄すると仮定する. これより, 以下の関係式が得られる.

$$\Pi = (1 - s_c)\Pi + pI, \quad (2)$$

$$\text{or } \Pi = \frac{pI}{s_c}. \quad (3)$$

—(2)式および(3)式の含意—

1. 資本家の消費と投資が利潤を決定する ((2)式).
2. 利潤は投資支出に比例し, 資本家の貯蓄率に反比例する ((3)式).

しかし, 投資をするには利潤が必要なのでは...?

—短期カレツキモデル—

短期では資本ストックが一定.

→ 稼働率を調整して産出量を調整することは, 雇用量を調整することと同じ.

短期で雇用量がどのように決まるのかを論じる.

実質総需要は次のようになる.

$$Y_D = \left(\frac{w}{p}\right) N + \underbrace{(1 - s_c) \frac{\Pi}{p} + I}_{\equiv A} \quad (4)$$

$$= \left(\frac{w}{p}\right) N + A. \quad (5)$$

生産量は生産関数で決まる.

$$Y = TN. \quad (6)$$

(5) 式と (6) 式より, 労働需要量が決まる.

$$N_D = \frac{A}{T - \frac{w}{p}}, \quad (7)$$

$$\text{or } \frac{w}{p} = T - \frac{A}{N_D}. \quad (8)$$

実質賃金が上昇すると労働需要が増える.

→ 雇用量はどのように決まるのか?

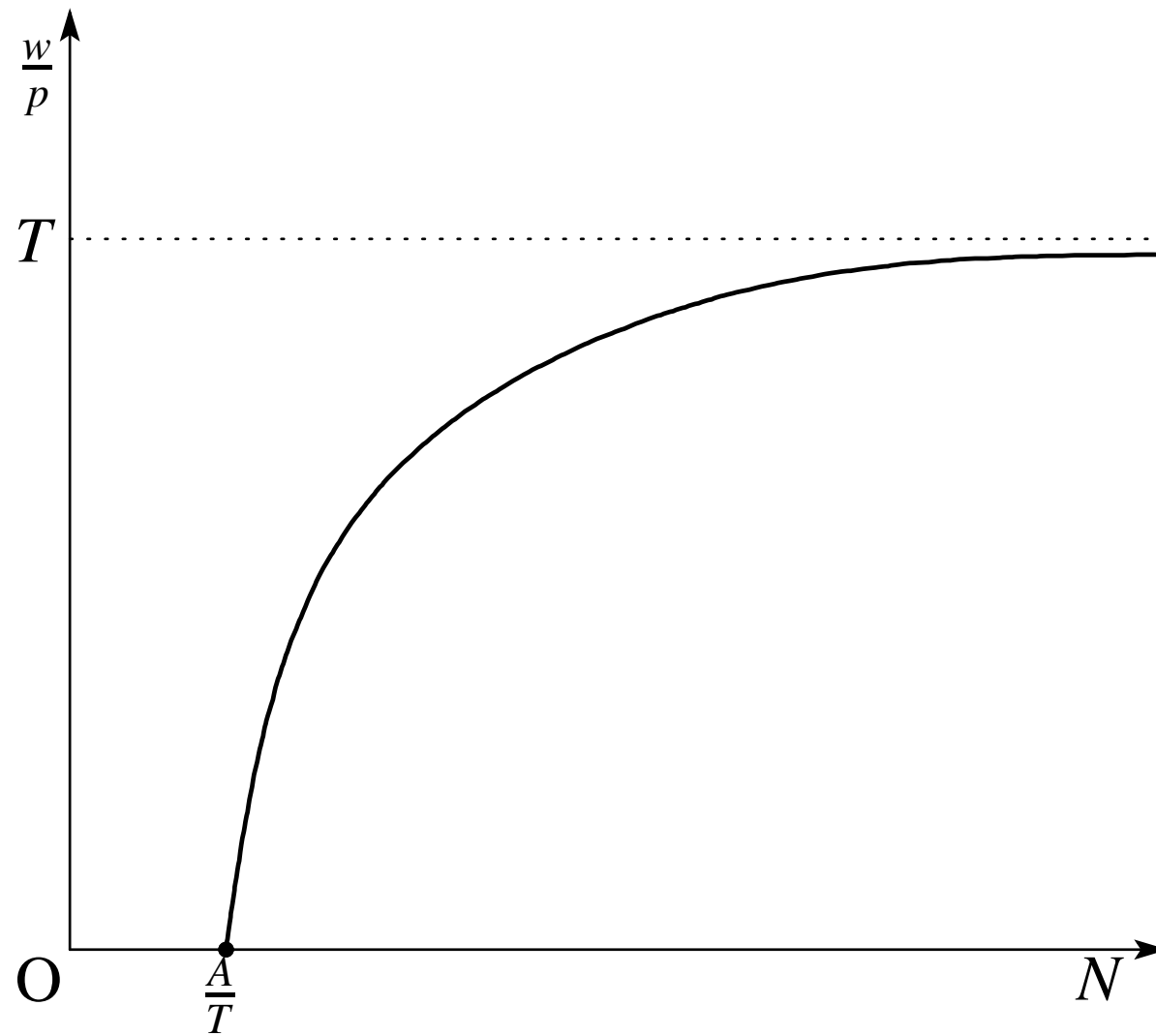


Figure 1: 雇用量の決定

—短期モデルからわかること—

1. 実質賃金が低下しても, 総利潤は変化しない.
2. 実質賃金が低下すると, 雇用量が低下する.
3. 資本家の貯蓄率が上昇すると, 雇用量が低下する.
4. 技術進歩が生じると, 雇用量が低下する.